

例は66才女性、約一年前から38度台の不明熱が続き、さらに物忘れ、動作緩慢、尿失禁等の痴呆症状が増悪したため、当科へ入院した。頭痛及び長谷川式痴呆スケールで14点の痴呆以外、神経学的異常はなかった。MRIでは橋背側から中脳、両視床、基底核、放線冠が、T1強調画像で低信号、T2強調画像で高信号を呈した。GD-DTPAでは増強されなかった。腰椎穿刺を施行。細胞数は19/3で、免疫染色では未分化なBリンパ球を認めた。全身リンパ節の腫大はなく、全身Gaシンチでも異常集積を認めなかった。中枢神経系原発悪性リンパ腫の診断でステロイドのパルス療法を施行。その直後から解熱し、頭痛、痴呆症状は改善、MRI上の梗塞様の所見も改善した。特異な画像所見及び髄液細胞所見に文献的考察を加えて報告する。

### 53) 三叉神経痛にて発症した小脳橋角部 epidermoid cyst の1症例

山口 裕之・林 征志  
松本 行弘・大宮 信行  
佐藤 宏之・井上 慶俊 (大川原脳神経外科)  
大川原修二 (病院脳神経外科)

三叉神経痛が後頭蓋窩腫瘍によって起こることが知られているが、なかでも epidermoid cyst によるものは極めて少ない。今回我々は、三叉神経痛を呈する小脳橋角部 epidermoid cyst の1症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。症例は65歳女性。27年来の左三叉神経領域の疼痛があり増悪、緩解を繰り返していた。1995年、他院MRIにて左小脳橋角部に直径1cmのT1にてlow、T2にてhigh、Gdにて造影されないmassを認め経過観察していた。テグレトール400mgにて痛みはコントロールされていたが、2000年4月になって痛みが増悪し外科治療目的に当院入院となった。MRI上は前回と同様の所見であり、脳血管造影では腫瘍陰影は認めなかった。5月8日にlateral suboccipital approachにて腫瘍を摘出した。病理はepidermoid cystであった。術後三叉神経痛は軽減し、テグレトールを減量し現在経過観察中である。

### 54) 膝神経節より発生した顔面神経鞘腫の1手術例

高島 靖志・日比野守道  
宇野 英一・若松 弘一 (福井県済生会病院)  
石田 恭央・土屋 良武 (脳神経外科)  
長谷川光広 (金沢大学)  
(脳神経外科)

症例は、51歳の女性。右顔面神経麻痺で発症。他院で顔面神経鞘腫と診断され、H11年8月、radiosurgeryを受けるも症状進行し完全麻痺となったため当科受診。聴力は正常であったが、canal palsyを認めた。MRIでは膝神経節より中頭蓋窩方向へ骨を破壊して進展する直径1.5cmの腫瘍を認めた。一部、内耳道内にも進展していた。中頭蓋窩より硬膜外アプローチにて手術を行った。手術所見より、腫瘍は膝神経節より大錐体神経・内耳道方向に進展した顔面神経鞘腫と考えられた。肉眼的に全摘。腫瘍を摘出すると蝸牛の骨迷路は一部破壊されていたが、聴力は温存された。後日、顔面神経再建術として、顔面神経-舌下神経ワナ吻合術を行った。比較的まれな顔面神経鞘腫の1手術例を文献的考察を含め報告する。

### 55) 左側頭葉部 dermoid cyst の1手術例

莊司 英彦・後藤 博美  
伊崎 堅志・蘇 賢林  
渡邊 慶吾・菊池 泰裕 (脳神経疾患研究所)  
渡邊善一郎・後藤 恒夫 (附属総合南東北病院)  
古和田正悦・渡辺 一夫 (脳神経外科)

dermoid cystの1手術例を経験したので報告する。症例は22歳女性で、前頭部を打撲し、単純CTを施行され、左側頭部に約3cmの境界明瞭な脂肪様の低吸収域病変を偶然に指摘された。MRIで、同部位はT1、T2強調画像ともにhigh intensityで、一部にiso intensityを含み、増強効果はみられなかった。また、左前頭部硬膜下腔にもT1、T2強調画像ともにhigh intensityの脂肪様病変がみられた。脳血管撮影では腫瘍陰影などの異常所見はみられなかった。左側頭部の腫瘍摘出術が行われ、dermoid cystと診断された。左前頭部の病変はdermoid cystの自然破裂によるものと考えられた。dermoid cystは頭蓋内腫瘍の0.04%から0.6%と稀な腫瘍で、特にテント上dermoid cystの報告例は稀であるので文献的考察を加えて報告する。